アルスハイル

十六夜　あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルスハイル

【Ｎコード】
Ｎ６７０９Ｊ

【作者名】
十六夜　あやめ

【あらすじ】
少年、陸（りく）と少女、由佳（ゆか）の切なくて儚いラブストーリー

プロローグ　～はじまりの出会い～（前書き）

最新作になります。
解りにくいところがあるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ　～はじまりの出会い～

あなたの目がもう少し、あとちょっとだけ見えますように――

雑踏の中を待っている。

横断歩道。赤く光る信号機。

雨。

ずっと考え事をしていた。

傘を握り締めている手が少しかじかんでいた。

鉛色の空から大粒の雨が降り、アスファルトは複雑な色に染まっている。

そんな七月はじめのある日。

僕は初めてその少女を見た。

彼女は傘も差さずに僕の向かい側に立っていた。

え。

と、思わず駆け出したくなった。

風引いちゃうぞ。

彼女は信号機をじっと見ている。

それから青に変わってもまだ立ち止まっている。

おいおい……。

彼女に駆け寄り話しかけた。

彼女は俺の存在に気付いていないのか、それとも聞こえていないのか、点滅する信号機をじっと見ていた。

灰色の景色の中で彼女だけが違う世界にいるようだった。

何も話さない彼女を近くの建物の下に連れて、雨宿りをした。

どれほどの間、雨の中にいたのだろう。体は冷たかった。

白い肌に大きな瞳。黒くて長い髪。白のワンピース一枚で下着が透けて見えている。

どことなく儚い雰囲気。華奢で、壊れそうで、ガラス細工のような繊細な美しさ。

びっくりするくらい綺麗な少女だった。

僕は羽織っている上着を彼女に着せ、携帯電話を取り出して病院に電話した。

彼女を見て様子と今いる場所の住所を伝えて電話を切る。

小さく口を開けて何かを言っている。

なんだろう？

僕は耳を傾ける。

なにも話さない。

僕は彼女の顔を見るとうれしそうに微笑んでいた。

僕の顔になにかくっついているのか……？

携帯電話の液晶を鏡代わりにして確認する。

なにもついてない。

彼女はまだ微笑んでいる。

一体、なんなんだ？

それから少しして救急車が来た。

彼女は毛布を巻かれ、手を引かれて歩いていく。

僕はそれを見届けてから軽く手を振った。

「じゃあね」という気持ちを込めて。

軽く微笑んで。

彼女は振り返り僕の顔を見た。小さく口を開いてなにか言っている。

聞こえない。

でも、唇の動きでなんとなく解った。

お兄ちゃん、ありがとう。

たぶん当たってる。

救急車は彼女を乗せて病院まで走っていった。車内からまだ彼女が見つめている気がしたが、それ以上何も起こることはなかったので、その場を後にした。

再度、顔に何もついていないことを確認した。

ショーウインドウに映る自分の姿も特に可笑しなところはない。

ならば、彼女はなぜ僕を注視していたのだろう。

きっと誰かと間違えているんだ。そうに違いない。

じゃないと僕があんなに女の子に見つめられるはずがない。

ぼくは単純にそう考えた。

でも。

僕の考えは間違っていた。

致命的に。

そして、運命的に。

僕はこの少女と出会ったときから大きく人生を変えられることになった。

プロローグ　～はじまりの出会い～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
気付いたことや感想を頂ければうれしいです。
これからも頑張っていくのでよろしくお願いします。

第一章　穢れなきアルテルフ

放課後。

僕はぼんやりと窓の外を眺めていた。

晴れ渡った夏の空は広く、人気の無い校庭は静かだった。全ての風景が写真のように見える。

ただ、よく耳を澄ませば時計の秒針が動いているのがわかる。しっかりと時を刻んでいた。

一羽の鳥が海の方へ飛んでいくのを見た。

遠景がはっきりと見えて、全体的に鋭く引き締まっているように見える。

この街では夏でもあまり気温が上がらない。他の街や地方と比べると十度は違うだろう。

そして、こんな日は決まって雨が降る。天気予報士が晴れと言ったところで誰も信じはしない。自分たちで空を見て、一日の天気を決めるのが風習だ。

今日はなんだかその気配が濃厚だな、と思った。
今日の夜は雨が降りそうだ。

「なに黄昏(たそがれ)ちゃってんですか？」

と、そこへ聞き慣れた声が廊下側から掛かる。

「陸ってもしかして、ロマンチストですかぁ？」

振り向くと教室の扉によしかかっている男子生徒がいた。

中山浩太(なかやまこうた)。

メガネがトレードマークのクラスの人気者だ。外見が大人びているため、女子からの人気が高い。

部活でもキャプテンを務めている。
でも、僕は彼のような元気で明るい性格と、一見無造作に話しか

けているようだが、もの凄く細かく気を遣っているところにいつも感心していた。

「なぁ、無視しなくてもいいじゃんかー」

「え？　あぁ、ごめん。少し考え事してて……」

少し笑って。

「もしかして、前に話してた女の子のことか？」

「うん、まぁそうなんだけど……」

少し苦笑い。

「誰が見ても変だと思うんだよね。だってさ、あの日は朝から雨だ

ったんだよ？　それなのに傘も差さずに外にいるなんて絶対におかしいよ」

「たしかになー。もしかすると彼氏と別れて気が動転してたんじゃないか？　そう考えるとつじつまが合うぞ。だってその子、口も利かなかったんだろ？　もしも俺だったら絶対に話したくないな」

浩太の推理は当たっているかもしれない。あのときの彼女はすごく落ち込んでいるようだった。

どこを見ているのか解らないくらいに。だから最後に、ありがとうって言ったのかもしれない。

「たぶんそうかもしれないね」

僕もそんなことがあったなら――

「でさ、その女の子の特徴教えてくれよ」

制服のポケットから紙とペンを取り出していた。

「聞いてどうすんだよ……。探すのか？」

「当たり前じゃないか！　陸がそんなに想ってる子だろ？　たぶん、いや、絶対にかわいい。違うか？」

「たしかにかわいかったよ。ってか、想ってなんかないよ！」

「はいはい。んで、特徴は？」

なんでだろう。浩太に対して少しイラっとした。

「一回しか言わないからな。えっと、身長は一五〇センチくらい。髪は黒くて長かったかな。年齢は僕らよりも小さいような気がする。中学二、三年生だと思う」

細かく思い出そうとするが印象に残っていることぐらいしか思い出せない。

あと覚えているのは彼女がワンピースを着ていたことと、雨に濡れて下着が見えていたことくらいだ。

こんなことを浩太に教えても意味ないな。

「このくらいしか覚えてないわ」

浩太はメモした紙を綺麗に折りたたみ財布（さいふ）にしまった。

「十分だ。十分すぎる情報をありがとう。必ず見つけてみせる！」

ひとり燃えていた。

「そういえば浩太、今日は演劇部練習ないのか？　さっき早川さんが探してたぞ」

浩太は目線を窓の外に向けて、

「あ〜こりゃ、あと一時間くらいで雨降るな」

「そうか？　夜だと思うんだけど……」

「わかってないなぁー。たしかに夜には雨は降ってるよ。でもあの雲の流れる早さだともって一時間だぜ」

木々が徐々に大きく揺れはじめ、ざわめきだした。空には厚く高い積乱雲（せきらんうん）が浮かんでいる。

「なるほど。それなら早く帰ったほうがいいかもしれないね」

「あ〜」

と、浩太は僕の方に向き直して、

「たぶんそれは無理。俺がここに来たのは伊藤先生が陸に頼み事をしたいから、説得よろしくってことで来てんだ」

背負っている鞄を机に置き、中を探りはじめた。出てくる物が奇妙だった。

ガム、小説、漫画、メガネ、トランプ、台本、お菓子袋、デジタルカメラ。

――一体何しに学校に来てるんだ？

「頼み事？　伊藤先生が？」

「あぁ。なんか手紙を一通預かってるんだ。おっ、あったあった」

浩太は小さく折ってあるメモと一通の手紙を僕に手渡した。星柄

の封筒で？星野由佳（ほしのゆか）さんへ？と書いてある。

――星野由佳って誰だ？

「じゃ、たしかに渡したぜ。あ、そうだ。美桜（みお）に会ったら今日は部活ないって言っといてくれ。俺は雨が降る前に帰るわ。また明日」

教室を出て駆け足で帰っていった。

「おい！　まだ引き受けるなんて言ってないぞ！　説得しに来たんだろ！」

返事もなく、廊下に自分の声が虚（むな）しく響き悲しくなった。

とりあえず折りたたまれているメモを広げて見ることにした。

～木崎陸君へ～

その手紙を星野由佳さんに届けてもらえませんか？

彼女は今入院しているのでお見舞いも兼ねてよろしくお願いします。病院名は有沢総合病院です。部屋は四〇五号室です。

追伸――星野さんには先に陸君が向かうことを伝えておきました。私の代わりにお願いします。

僕、木崎陸はどこにでもいる極一般の高校二年生だ。

帰宅部として毎日、放課後は真っ直ぐ昇降口を降りて、下駄箱に向かう。

そんな僕が、今日は少し遅い帰宅になりそうだった。いつもの帰り道とは逆の方にある病院に行くことになったからだ。

「なんで僕が手紙を届けないといけないんだよ……」

学校を出ると、空が雲で覆われ始めていた。

このままだと確実に一時間以内に雨が降るだろう。

僕は雨が嫌いではない。

不便で、めんどくさいがその匂いや凛とした冷たさが好きだった。

独りで静かに眺めているとなんとなく心が落ち着く気がするのだ。

ついでに言うと雨の中を散歩するのは結構、好きだった。

校門を出て見慣れない道を眺め、病院に向かう。

「あの、陸君！」

後ろの方で、誰かが声を掛けてきた。

振り返ると同じクラスの早川美桜（はやかわみお）さんが、息を切らしながらこっちに走ってきた。

膝に手を付け、おかっぱにした真っ直ぐな髪に顔が隠れる。

よくクラスのみんなが早川さんのことを、幽霊だの市松人形だの言っていた。

僕からすると可愛い女の子にしか見えないのに。

「大丈夫、早川さん」

「あ、えっと、はい、大丈夫です。あの、中山君を見ませんでしたか？」

「浩太なら先に帰ったよ。あと、浩太から伝言で今日の部活はなしだって」

「そうですか……。ありがとうございます。これから帰るのですか？」

「うん。でもその前に病院に寄らなくちゃいけないけどね」

「どこかご体調が悪いのですか？」

「いや、伊藤先生から手紙を預かっててね。入院してる星野由佳に渡してほしいんだってさ」

「由佳さんですか。最近学校で見ないと思っていたら、入院しているのですか……」

――由佳さん？　最近見ない？

「え、早川さんこの人知ってるの？」

彼女は首をかしげてくすっと笑った。

「もちろん知っていますよ。一年生のときに同じボランティア委員でしたから。それに、二年生になってからは隣のクラスですよ。知らなかったのですか？」

「初耳だよ」

「もったいないですね」

――？

「由佳さん、とっても綺麗でかわいい方ですよ。彼女にしたい候補ナンバーワンだそうです」

「そうなの！　何にも知らないなぁ。そんなに可愛い子学校にいるんだ～」

「あ！　すいません。長々と話してしまいました。これ以上引き止めるのも悪いので、私は戻りますね」

「星野さんに会ったら早川さんのこと伝えておくね」
「ありがとうございます。急がれたほうがいいですよ？　雨が降ってきますから」

手を振りながら彼女は、小走りで校舎の方へ戻っていった。

陸橋を渡り、商店街を抜け、市の南西部に向かう。街の中心部だった名残を残す町並みだ。

十数年前はこの南西部が市の中心だった。
だが、巨大な地震と津波の影響によって市は崩壊。

それから数年後、街は元と同じように再生したが、市は今の東南部に移った。
今ではこの地区に住む人も減り、お店の大抵は、シャッターが下ろされているままになっている。

そこで僕はシャッター街を背景に、じっとこちらを見つめている男子生徒に気がついた。辺りには他に誰もいないので、よけいにその姿が目立った。

おそらく同じ学校の生徒だろう。

大きなあくびを片手で隠すと、空を見上げ、シャッターにゆっくりともたれかけた。眼鏡を外し、目を細めてこちらを見つめている。

あれって、もしかして……浩太？

じっと見つめていた男子生徒は、僕に気がついたのか、両手を左右に大きく振っている。背が高く、大人びたその男子生徒は浩太だった。

ガードレールを跨ぎ、車が来ないのを確認し、こちらに来た。

「よう、遅かったじゃんか」

「浩太！　なんでここにいんだよ」

「いや、手紙の受け取り主が星野由佳って書いてあったからさー。最近入院したって聞いてたからお見舞いに行こうかなぁって。でも一人で行く気にもなれなかったので、陸を待っていたというわけ」

「浩太も星野由佳について知ってるんだ。なら手紙も浩太が出してくれればいいのに！」

「だってあの手紙は陸に渡してくれと頼まれたものだからなぁー。俺が渡すわけにもいかないだろう？」

「まあ、そうだけど……」

「たとえ俺が陸の名前を使ったとしてもバレるしなぁー。星野由佳は俺を知ってるからな」

僕は小さくため息をついた。そして、ゆっくりとした足取りで病院の中へ入った。

「それにしても、ここはいつも人が多いなぁー」

この街には大きな病院がひとつしかない。それが南西部にある有沢総合病院。
多くの患者はここで治療を受ける。そのため、この静かな街も、ここだけは騒がしかった。

今日も多くの患者が治療を受けに訪れている。

病院の正面玄関をそのまま通り過ぎ、右側へ進むと待合室がある。
その左側にあるエレベーターで四階に上がる。

チン。

開いた扉の目の前にある、ナースステーションに星野由佳の病室を訪ねた。

突き当りを右に曲がり、長い廊下に目をやる。一番奥の左側が病室らしい。

歩いていくと、病室に一人の名前しか記されていないことに気がついた。すべてが個室になっているようだ。

廊下の一番奥左側。

あった。

星野由佳のタグが張られている。

なぜだか緊張していた。考えると病院へ来るのは久しぶりだった。ましてや入院している人の病室に入るのは、おじいちゃんが入院していたとき以来だった。

大きく深呼吸をし、心を落ち着かせる。

ふと、入った後に何を話せばいいかを考えた。

――今日はいい天気だね。

最悪だ。いい天気もなにも、今日は曇りだ。しかも、想像上の自分がやけに爽やか過ぎる。後に雨も降ってくるっていうのに。他に考えよう。

――最近どう？

ありえないな……。まず、初対面かもしれない人にこれはないな。もっと他に考えよう。

――病室広い（狭い）ですね。

なんでこうなる。病室の感想なんてどうでもいいじゃないか。それに、このあと何を話せばいいかも思いつかない。もっと真剣に考えよう。

――手紙を預かってきました。

これだ！　これでいいんだ。そもそも手紙を渡しに来たんだ。ついでに仲良くなれたら一石二鳥だ。我ながらナイス計画。

扉をノックしようとしたそのとき、

びろろろぉーん！　びろろろぉーん！

ふおぉっ！

浩太の携帯電話の着信音が廊下に響いた。

「悪い！　マナーモードにするの忘れてた！　先に入っててくれ」

廊下を走る浩太を、看護婦さんが厳しく注意している。浩太は何度も頭を下げていた。

僕はもう一度深呼吸をし、軽くノックをする。

「はい」

返事が返ってきた。

「えっと、木崎陸です」

「どうぞ」

扉を横に引いて中に入る。ほんのりと甘い、いい香りがした。

ここも同じく個室だった。広さは九畳くらいで、扉の横に洗面台と鏡があり、彼女の私物のようなものが紙袋に入って置かれている。ベッドがひとつ、窓際に沿うように置かれている。

病院はどこでも一緒だが、真っ白だった。カーテンもシーツも壁も天井も白い。窓のそばに飾ってある花も白かった。

そしていた。

星野由佳がベッドに座っている。ちょこんと、手を膝の上に置いて。

薄く開いた窓から吹く風が、長く甘い香りのする黒髪をなびかせていた。

二、三歩前に進むと、閉めた扉が勢いよく開き、浩太が入ってきた。僕は彼に突き飛ばされ、床に倒れこんだ。

「悪い……。てか、なんで扉の前にいんだよ……」

「いっっっっっ。なんでそんな勢いよく……。なに考えてんだよ浩太！」

「あの……、大丈夫ですか？」

少し上から聞こえるほっそりとした声。

ベッドの上から見下ろす彼女の姿に僕は息を呑んだ。

くもりのない綺麗な瞳。服を着ててもわかるくらい華奢で、飴細工のような繊細な美しさ。

あれ、どこかで一度会ったような……。

僕は笑いながら「大丈夫です」と答えた。そして。

「あ」

と、思い出した。

この人はあの雨の日に傘も差さずにいた女の子だ。

僕の心臓がとくんと大きく音を立てて高鳴った。

第一章　穢れなきアルテルフ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想をいただければうれしいです。

第二章　迷子のエトワール（1）

僕は星野由佳をなんと形容して良いか分からない。

例えるなら、あの雨の日に出会った彼女は、虚ろな瞳をした、行き場のない子犬のようでした。それに比べ、ベッドの上から覗き込んでいる彼女は、すごくシンプルな服を着て、穢(けが)れを知らない無垢(むく)な瞳をした綺麗な女の子。

まるで別人のようだった。同じ人とは考えにくかった。

僕はもやもやしていた。ある悩みを解消したくて彼女に質問をした。目を細め、

「きみは……」

彼女はきょとんとして微かに小首を傾げた。服の中を見られていると思ったのか、シーツを胸の辺りまで引っ張り上げた。その仕草が妙に艶(いろ)っぽかった。

「陸、いつまで倒れてんだ？」

お前が突き飛ばしたんじゃないか……。

起き上がって軽く手で埃を払った。だけど、病院だけあってあまり汚れていなかった。

「いや、えっと、たぶん君に会うのはこれで二度目だね。あのときはちゃんと挨拶してなかったね。まあ、挨拶なんてしている状況じゃなかったけど……。はじめまして。覚えているかな？」

彼女は首を横に振った。

「そっか」

「ごめんね。わたし、どうして入院しているかもわからないの」

僕は少し不安になって尋ねた。

「記憶喪失なの？」

胸に引き上げたシーツを戻し、彼女は長いこと時間を掛けて考え、ようやく喋った。

「記憶喪失ではないと思うの。一時的に記憶が飛んじゃったみたい。これって記憶喪失になるのかな？」

彼女の声はひどく澄んでいた。

僕は「記憶喪失になるのかな？」と、オウム返ししてしまった。

「でも、元気そうだな。調子はいいのか、由佳」

浩太は僕のフォローをしてくれた。さすが、一応頼りになる。そういや、彼女と浩太は知り合いなんだっけ。

「元気だよ。浩太がお見舞いに来るなんて聞いてなかったよ。どうして来たの？」

彼女はいたずらっぽく浩太に問い掛けた。

「どうしてと言われるとなんと答えればいいか……。まあ、心配になったからが正解だろうな。あまり意地悪しないでくれ」

浩太がなんだか、小さく丸め込まれているように見えてしまった。

「さっき廊下で電話が鳴ったの浩太でしょ。だめだよ？　病院内は電源を切りましょう」

「……わかってるよ」

左手で髪をくしゃくしゃと掻いて腕を下ろすと、申し訳なさそうな顔をして、

「悪い。母さんにちょっと買い物頼まれた。先に帰るわ。また今度お見舞いに来るよ」

浩太は「雨降ってくるぞ」と言って病室を出て行った。窓の向こうは灰色の空が広がり、ぽつぽつと雨が降っていた。

浩太が病室から出て行ったあと、僕と彼女は無言のまま外を眺めていた。それから、彼女はくるっと僕の方を向いた。じっと僕を見つめている。覗き込むように見続けて、そして。

「綺麗な瞳だね。でも、まだ見えていないみたい（・・・・・・・・・・）。あなたの目がもう少し、あとちょっとだけ見えますように――」

彼女は目を閉じて、胸の前で両手を組み、まるで流れ星に祈るかのようにして、願い事らしき言葉を口ずさんだ。

僕は改めて星野由佳の美しさに感銘を受けていた。

顔立ち。肌の艶色。淡く、儚く、脆いという印象を強く受ける。世界にあるどんなに可憐な花でも、彼女の美しさには勝てないと思ってしまった。

繊細な艶を帯びた黒色の長い髪。

そこに華奢な身体がすっぽりと埋まっている。白く細い足がシーツから伸びている。

目を開いた彼女の瞳は丸くて大きい。涙で潤んだ瞳はきらきらと輝いている。

僕はちょっと咳払いをしてから自己紹介を始めた。

「えっと、遅くなったね。僕の名前は木崎陸。さっきのは何かのおまじない？」

と言ってから彼女の目を見た。

どういうことなんだろう。まだ見えていないみたい（・・・・・・・・・・）って。
この病室には何かあるのか？　彼女の言葉から考えると、普通に見えているものだと思うんだけど……。

彼女は囁くように喋った。

「あれはね、今のあなたが見ている世界について言ったの。あなたの瞳（め）にはほんの小さな世界が見えていないの。だからね、神様にお願いしたの。もっとよく見えますようにって」

僕は少し困惑する。

「えっと、小さな世界って？　昆虫の世界のこと？」

彼女はくすっと笑い、

「昆虫の世界なんかじゃないよ。それは自分の瞳（め）で見つけなくちゃいけないの。大丈夫だよ。すぐに見えるようになるから」

彼女のその言葉が、なんだかよく分からないけれど、僕らの関係が少しだけ縮まったような気がした。

「わたしの自己紹介をしていなかったよね。わたしの名前は星野由佳。言わなくても知ってるよねー。わたしね、体がちょっと弱いの。

そのせいでね、あまり学校に行けないんだ……。人生の三分の二は病院で生活してるの」

その澄んだ柔らかい声に、彼女の哀しく辛い想いを感じた。たとえようが無いくらい物悲しくなる。僕は心乱される気持ちになり、いまにも涙がこみ上げてきそうになった。

ちらっと病室に置かれている時計に目をやって、

「星野さん。申し訳ないんだけど、そこの椅子に座っていいかな？立っているとなんだか話しにくくて……」

積み重ねられた丸椅子をひとつ取り出し、かばんを横に置いて座った。

「ねえ、星野さ――」

彼女は僕が呼びかける前に、言葉を遮り言った。

「陸くん。わたしね、星野って呼ばれるのあまり好きじゃないんだよ。できれば名前で、由佳って呼んでほしいな。名前って自分の大切なものだからさ」

彼女は少し姿勢を低くして僕を覗き込み、上目遣いをしてお願いしてきた。

「じゃ、じゃあ……由佳さん」

「?さん?もつけなくてもいいよー。由佳って呼んで」

僕はまた困惑する。

「ゆ、ゆか……」

彼女は満面の笑みを浮かべた。

僕は彼女が……由佳が「うん」と頷くのを待ってから喋ろうとした。途中、由佳に渡す手紙のことを思い出した。

「あ、そうだ！　先生から由佳に手紙を預かってきてるんだ」

由佳に手紙を渡す。それを嬉しそうに受け取り、封を切って黙読し始めた。病室のベッドの上で手紙を読む由佳の姿は絵になっていた。そこには神聖な空間が広がっている。由佳は笑みを浮かべながら手紙を読み終えた。

そこに何が書かれているのかはわからない。だが、きっと幸せなことが書いてあるのは間違いないと思った。

「陸くん。最近学校たのしい？」

「まあ、毎日同じ授業の繰り返しだからね。楽しくはないかな……。でも、昼休みの会話とか昼食とか、放課後のぼぅーっとする時間は楽しいかな」

由佳はにこにこしながら僕の話を聞いていた。

「どうしたの？」

「ううん。陸くんがあんまりにも嬉しそうに話すから、私まで嬉しくなっちゃった。毎日楽しんだね」

僕は普通に話しているだけだった。しかし、由佳には僕が嬉しそうに、楽しそうに話しているように見えたようだ。

「そっかー。いいなー。私も学校に行って友達とお話ししたり遊んだりしたいな」

由佳はうらやましそうに僕を見つめ、細く白い足をベッドの上でぱたぱたと上下に揺らしていた。

「みんなもきっと退院を待ってるよ。今日ここに来る前に早川さんに会ったんだ。でね、早川さんがお大事にと言ってたよ。早川さんとは仲いいの？」

「うん。美桜ちゃんは一年生のときボランティア委員で一緒だったの。そのときにすごく仲良くなったんだー。美桜ちゃんに「ありがとう」って言ってくれる？　まだ退院できないみたいだから……」

本当は由佳自身が早川さんに会って言いたいのだろう。それが出来ないの知っているから、余計に由佳の表情が悲しく見えた。僕は「わかった」と言うことしかできなかった。

病室の窓の外から雨の音が聞こえる。窓の外を見ると、相当激しく降っているようだった。傘を持っていない僕はため息をついて困

った。

「どうしよう……。さすがに傘無しではちょっと辛いなぁー」

「傘持ってないの？　それならそこに置いてある傘使っていいよ。少し小さいけれど気にしないでね」

入り口の横に一本、水色の傘が立ててある。

「いや、そんなの悪いよ。それに一本しかないし……」

「大丈夫だよ、私は使わないから。逆にね、使ってくれると嬉しいな」

僕は由佳の言葉に甘え、傘を借りることにした。

「それじゃあ、お言葉に甘えて借りるね」

「うん。その傘返さなくていいから」

「ううん、そんなのダメだよ。明日持ってくるね」

「別にいいよ？　もう私は使わないだろうから」

「いや、借りたものはしっかり返さなきゃ。じゃあ、また明日持ってくるね」

僕は左手に傘を持ち、右手で手を振ってさよならし、病室を後にした。

外に出て傘を開いてみると、内側は少し錆びていて、ひらがなで『ほしのゆか』と書かれていた。由佳がかなり小さいときの傘なのだろう。僕はその小さな傘を差して歩き始めると、見事に雨が身体を濡らした。

結局、家に帰るまで僕の両肩はびしょびしょに濡れっぱなしだった。

雨は一向に弱まることはなかった。厚い灰色の雲が天を覆い隠している。この地方では梅雨の時期がない。しかし、七月はよく雨が降り、幾千もの星たちを見ることができなくなる。近年、七月七日の七夕の日は、曇りや雨で天の川や天体を観測することができずにいた。今年の七月七日は天気予報で晴れになっていた。

僕は存在(いる)のかわからない神様に晴れることを祈った。

――どうか、今年は晴れますように。

なぜかそのとき、由佳の笑顔が脳裏に浮かんだ。その笑顔が今日見た笑顔とは違って見えて、本当に笑っているように見えた（・・・・・・・・・・・・・・）。

夕食を食べたあと、自分の部屋に戻り、宿題をしながら由佳のことを考えた。

「あの日あった女の子は由佳なんだよな。なんか違う雰囲気というか、幼く見えたというか……。由佳自身は覚えていないみたいだから、一体あれは何なんだろう……」

あの日の出来事を思い返しているうちに、僕は机に突っ伏して寝てしまった。

第二章　迷子のエトワール（1）（後書き）

まだまだ最初です。これからも読んでいただけると幸いです。

第二章　迷子のエトワール（2）

五時半過ぎ。僕はなぜだか目が覚めた。

眠たい目を擦りながらカーテンを開けると、空はまだ暗かった。陽が出ていないわけではなく、灰色の雲が空を覆っている。目を凝らして外を覗くと小雨が降っていた。「今日は朝から天気悪いな……」

椅子に座ったまま寝たせいで体が痛い。床に座り軽めのストレッチをして体をほぐし、カーテンをもう一度閉めてベッドに寝転んだ。「……まだ一時間くらい寝れるな」

――――

あれから何分経っただろうか。僕は一向に寝付けずにいた。体の向きを変え、枕の位置を変え、あらゆる手段を使って寝付こうとする。

だが、それでも眠れない。

「あぁもう！　なんで眠れないんだ。もう六時か……。はぁ……起きていよう……。」結局、そのまま起きて寝癖を直し、制服に着替えてみんなが起きるのを静かに待つことにした。

朝食をとって僕は歯を磨きながらテレビを見た。一週間の天気予報で明々後日の七月七日は晴れマークが出ている。それも星がよく見える澄んだ夜空になるようだ。天気予報は信じないのだが、今回ばかりは信じてみようと心の底から思った。

そして生まれて初めて、てるてる坊主を作って吊るした。

由佳から借りた傘を持って学校へ行き、教室に入ると早川さんが遠くの空を見上げていた。

「おはよう、早川さん。どうかしたの？」

彼女は振り返って行儀よく挨拶をすると、直ぐにまた窓の方を向いて雨の降る空を見上げた。

「いえ、今日の天気も雨で嫌だなと思いまして。最近雨ばかりで、髪の毛が跳ねてすごく大変です。櫛(くし)で梳(と)かしても全然直らないんです……。恥ずかしいからずっと窓の外を眺めているんです……」

彼女は深刻そうに髪を撫でながら言った。いつも真っ直ぐな彼女

の髪がぴょんぴょん跳ねているのは珍しく、なにより新鮮に見えて可愛かった。

「早川さんあまり気にしないほうがいいよ。それに、全然変じゃないよ。むしろすごく似合ってるよ」

「えっ、ほ、本当ですか？　お、可笑しくありませんか？」

「全然。ちっとも可笑しくないよ」

彼女は頬を赤く染めながら小さく俯いた。それでもやはり気になるのか、何度も両手で髪を梳かしていた。

「もうそろそろチャイム鳴るし、席に座ろうか」

彼女は俯いたまま「はい」と言って自分の席へ向かった。

僕の席は教卓から見て教室の左端の一番後ろだ。そこからは全体を見渡すことができる。

ほとんどの生徒が席に座って隣の席の奴と談笑をしている。その中で机の上や横に鞄が掛かっていない席があった。ホームルームが始まる時間になっても学校へ来ていないのはあいつしかいない。

そこは浩太の席だった。

「また遅刻ギリギリに登校するのか？」

担任の伊藤先生が教室に入ってきた。クラス代表の号令と共に挨拶をして座ると点呼が始まった。

……おい、浩太。早く来ないと遅刻になるぞ。

先生は次々と出席確認を済ませていく。そして、浩太が呼ばれた。

「えっと、今日は中山君はお休みですか？　誰か連絡を預かっている人いませんか？」

浩太は担任にも連絡を入れていないようで、少し気になって先生に見つからないように机の下で浩太にメールを打った。

「ねえ木崎君。中山君のこと聞いていませんか？」

――――！

いきなり呼ばれて驚いてしまい、両膝を机にぶつけた。ガンッ！という音が教室に響いたと共に、持っていた携帯電話を落としてしまった。あわてて、

「いえ！　なにも聞いてませんし、知りません！」

と、あいそ笑いを浮かべながら、右足で開いた状態の携帯を引きずり、隠した。

「そうですか、あとで連絡をとってみます」

先生は特に何も気にせず、心の内で考えていた事も聞かないまま、その場はなんとなく過ぎていった。

ホームルームが終わり、先生が教室から出て行くと、足元で震えている携帯を取った。いつ先生が来てもいいように机の下に隠しながら確認すると、浩太から電話が掛かっている。

電話に出るか少し迷っていると切れてしまった。廊下を見て先生がいないのを確認して着信履歴を開いて浩太に電話を掛けた。

「もしもし！」

――――！？

浩太の携帯から知らない人の声がした。

「えっ！　あ、は、はい！　もしもし……」

「よかった！　私は有沢総合病院の櫻井といいます！
この電話の持ち主、中山浩太さんが事故に遭われました。ご家族の方にお電話したのですが、繋がらなかったのでそちらにお電話させていただきました。
あなたは中山さんのご友人ですか？」

「あ、はい！　あの、浩太は無事なんですか！」

「はい、怪我は大したことありません。ただ、頭を打っているかもしれないので、一応検査するために病院に搬送しますね。そちらの学校の方に連絡していただけますか？」

「はい、わかりました。あの、浩太と話すことできますか？」

「ちょっと待ってください。いま確認してみますね」

向こうで「浩太さん、少しお話できますか？」と尋ねているのが聞こえる。

「少しですが大丈夫ですよ」

雨が傘に当たっている音と多数の人の声が聞こえる。
「そっちの人は大丈夫か！」
「こっちは無傷のようです！」
「一人は病院に搬送。運転手はその場で待機させ、事故の事情を警察に伝えてもらうようにして下さい」「すみません、前の車の持ち

主いらっしゃいますか？　救急車が通るので移動させていただけますか？」

本当に事故に遭ったのか……。

「もしもし、陸か？」

「浩太！　お前大丈夫なのか、怪我してんだろ！」

「平気へいき。ただのかすり傷だ。傘差しながら自転車で登校してる途中に、風に煽(あお)られて車の前に出ちまった……。車を運転していた人が直ぐにブレーキ踏んでくれたから助かったよ――」

電話の向こうでパトカーのサイレンの音が聞こえた。

――「あ、悪い。詳しくはまた後で電話する」と浩太は電話を切った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6709j/

アルスハイル

2010年12月22日13時55分発行